

平成 30 年 9 月 8 日現在

機関番号：34427

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380725

研究課題名(和文) 女性労働と経営の歴史社会学的研究－「ごりょんさん」の日記分析を中心に

研究課題名(英文) The sociological research about the history of women and management

研究代表者

荒木 康代 (Araki, Yasuyo)

大阪経済法科大学・経済学部・教授

研究者番号：10580243

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1920年代の商家の生活を妻の視点から詳細に見る事によって、仕事と生活の関係について考察する事を目的とした。この事は、公私分離と性別分業に基づく近代的経営について再考する事でもあった。対象としては2人の商家の妻、久子とさとを取り上げた。昭和2年と6年の久子の日記の翻刻と同商家の番頭の手記の翻刻を行い、分析した。さらに、さとが商家の妻を育成するための女子実務学校を設立した経緯についても調査を行った。

このような調査分析を通じて、公私分離がまだ明確でなかった戦前の商家経営では仕事と生活は必ずしも対立するものではなく、妻の商家経営に対する発言権も担保されていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research is the reconsideration of the relationship between work and life by observing merchant family lives in 1920s from the viewpoint of their wives. For this purpose, I dealt with two merchant wives, Hisako and Sato's cases. We translated and analyzed Hisako's diary in 1927 and 1931 and the manager's note. Moreover, I investigated the process that Sato established a girl's business college in 1919 to train merchant wives by examining the old documents and conducting field research.

By careful investigation and analysis of these data, this research discloses the fact that work and life were not necessarily separated and the merchant wives were guaranteed the participation in their business management in prewar days, when the separation of public and private matters and sexual division of labor were not evident.

研究分野：経営社会学

キーワード：ジェンダー 女性 経営 商家 日記 生活 教育

## 女性労働と経営の歴史社会学的研究

「ごりょんさん」の日記分析を中心に

---

機関番号	34427
研究種目	基盤研究 (C)
課題番号	25380725
研究期間	平成 25 年度 - 平成 29 年度
研究課題名	女性労働と経営の歴史社会学的研究 - 「ごりょんさん」の日記分析を中心に -
研究代表者	荒木 康代 (ARAKI YASUYO)
	大阪経済法科大学経済学研究科・教授
研究者番号	10580243

---

## はじめに

### (概要)

本研究では、大正及び昭和初期の商家における人々の生活を商家の妻の視点から詳細に見ることによって、仕事と生活との関係について再考することを目的とした。このことは、公私分離と性別分業に基づく近代的経営について批判的に検討することでもあった。資料の分析・調査を通じて、公私分離がまだ明確でなかった戦前の商家経営では、仕事と生活は必ずしも対立するものではなく、妻の商家経営に対する発言権も担保されていたことが明らかになったのである。

## 1. 背景

明治以降、西欧の近代的経営が流入すると、日本の商家の経営のあり方や人々の働き方は大きく変化した。従来、生活と労働は決して対立するものではなく、生活の中の一部として労働があり、そこでは、性別による仕事の分担はあるものの、仕事は男性、家事育児は女性といった性別分業を前提としていたわけではなかった。夫婦は協力して家族の生活や仕事、そして家の経営を行ったのである。しかし、職住分離（公私分離）、性別分業を前提とする近代的経営と近代家族が普及することによって、経営の領域は男性、家事育児の領域は女性といった性別分業が固定化した。このことによって、女性が経営に参画することも、男性が家事育児をすることも困難になっていったのである。

近代的経営が広がるにつれて、「公私分離」と「性別分業」はあたかも普遍的なものであるかのように考えられるようになった。女性の「主婦化」は、従来近代家族の観点から研究が進められ、多くの蓄積が築かれてきたが、近代的経営の視点からの研究はほとんど無かった。言い換えれば、経営史研究の領域にジェンダーの視点はなかったという事になる。そのため、近代的経営に移行する以前の商家経営において、商家の妻が担っていた経営における役割も、また経営に貢献してきた女性の存在も研究対象とされることはなく、その存在も忘れ去られてしまったのである。

## 2. 研究の目的

このような観点から、本研究では、経営史研究にジェンダーの視点を取り込みことによって、「経営」の歴史について新たな視点からアプローチすることを目的とした。これまで前近代的な働き方として顧みられてこなかった商家経営のあり方やそこでの働き方、また商家経営における女性の役割に光を当てることによって、近代的経営とは異なる「経営」の可能性について考察した。このことは、女性の地位が今よりもはるかに低かった時代に、なぜ多くの商家女性が商家経営に重要な役割を果たし、さらに経営に大きな発言権をもっていたのかということについても通じる。その背景には、店の経営と家の経営が完全に分離せず、混じりあって成り立っていたことが大きく影響していたからである。

今日、性別分業に基づいた公私分離の問題点が噴出している。女性の就業が増加したというものの、家事育児の負担は女性に集中しており、育児負担により就業が継続できない現実がある。「女性活躍」というお題目をいくら唱えても、企業をはじめとしたさまざまな分野での女性リーダーは一向に育たない。また、男性も育児時間や家族と過ごす時間をとりたいたと思って、それがかなわない現状がある。ワークライフバランスのための施策がいくら考案されても、仕事と生活は対立するものであり、そのうえで仕事が生活に優先している現状が変わらない限り、問題は解決しない。問題の背景として、近代以降当然とされてきた性別分業や公私分離に基づいた経営や家族生活そのものを考え直す必要があるのではないかと考える。

今日のように生活と仕事が現在ほど分離していなかった時代の「経営」や「生活」についてあらためて考えてみることによって、これからの経営や働き方、また生活のあり方に対するヒントが得られると思われるのである。

### 3. 研究方法

本研究は、第一に戦前期の商家の妻の日記の翻刻と分析及び関連資料の調査、第二に、近江地域の商家の妻で後に女学校を設立した塚本さとの事例の二点について研究を行った。

まず日記については、所有者から委託を受け大阪市史編さん所が保管している杉村久子日記（昭和2年から昭和19年まで10冊分が現存）及び杉村家関連文書から、昭和2年と昭和6年分の日記を翻刻し、時代背景や家族・親族・知人等についての関連調査も含めて研究・分析した（その後、明治末期から大正期にかけての日記13点が見つかった）。

当研究にあたっては、日記の所有者で日記筆者杉村久子の孫にあたる稲岡正子氏、及び日記の発見者で元大阪市史編さん所研究員の石原（植木）佳子氏の協力を得て、定期的に報告及び研究会を行いながら調査研究した。

近江の淡海女子実務学校を設立した塚本さとについては、現存する滋賀県神崎郡五個荘にあるさとの実家である塚本家（聚心庵）や女学校校舎の調査を行うとともに、五個荘地域の現地調査を行った。また、文献については、東近江市近江商人博物館所蔵の資料や聚心庵（塚本家）所蔵の塚本家文書の閲覧、調査、分析を行った。

### 4. 研究の成果

研究報告書（本紙）

第1部「杉村久子日記」（第1部目次参照）

第2部「商家の妻を育成する－淡海女子実務学校成立の過程」（第2部目次参照）

研究報告書資料編「杉村久子日記 昭和二年」 石原（植木）佳子編

研究報告書資料編2「杉山田庭 丁稚奉公五十年」稲岡正子編

第1部は杉村久子日記の研究成果である。第一に、杉村久子日記昭和2年分については、研究協力者石原（植木）が全文翻刻（ ）を行った。これについては、2017年に3月に製本し提出済みである。また、昭和6年分の翻刻については、研究代表荒木が担当した（ ）に論文所収）。本日記が発見された経緯及び杉村家については、稲岡によって詳しく説明されている（ ）に解説所収）。

対象の杉村久子日記は実に詳しく日々の生活について綴られていたため、戦前の商家の妻の生活について詳細で具体的な様子を観察することができた。特に、昭和2年分の全文翻刻は、昭和初期の商家の妻の日記として翻刻されているものが極めて少ない中で、昭和初期の商家の女性の役割や都市生活を知るための貴重な資料となりうると考える。また、解説では産業化、都市化が進み、「大大阪」と呼ばれた時代の中で具体的にどのような変化が起こり、日記筆者である久子の生活にどのように影響していたかについて、石原（植木）によって詳しく解説されている。さらに、同論文では、五代友厚とともに大阪の経済発展に尽力した日記の著者杉村久子の夫杉村正太郎や他の人々との関係、さらに杉村家の人々についても詳しく解説されており、明治から大正・昭和初期に至る激動の時代の中で生きた杉村家の人々のストーリーとしてもきわめて興味深いものである（ ）所収）。この点については、稲岡氏の「杉村久子日記について」（ ）所収）でも、杉村家の人々及び日記発見の経緯について書いていただいております、さらに系図も作成していただいたため、日記理解の助けになると考える。

昭和6年の日記では、杉村家の経営悪化と縮小、それに伴う店員の減少によって、久子の店員に対する役割は急減し、代わって家庭内での母親としての役割が増加していく様子について荒木が紹介、解説している。昭和初期の経済不況の時代、都市生活者の中心が旧中産階級から新中産階級へと変化していく中で、杉村家に起こる様々な出来事は時代の変化と密接に結びついている様が日記から読み取れるのである。（ ）に論文所収）。

さらに、本研究では杉村家の番頭といった立場であった杉山庭氏の原稿「丁稚奉公五十年」の全文翻刻（ ）を稲岡が担当して行った。本翻刻からは、杉村久子日記にはほとんど記述されていない杉村倉庫等、久子の夫正太郎の事業内容とその盛衰について詳しく知るとともに、店と家の経営が未分離であった戦前期の商家の番頭の役割についても詳しく知ることが出来る（ ）に解説）。

第2部は、近江の淡海女子実務学校を設立した塚本さとについての研究成果である。さとがなぜ70歳を超えてから女学校を設立しようとしたのか、またなぜそれが可能であったのか、という点について調査研究した。その結果、近江商人の地域である五個荘の地域特性や近江商人の妻の役割といった観点から説明することができた。当時の良妻賢母という国家の教育政策よりも、近江商人の妻として商家の経営を支えていける商家の妻の育成の方が、当地域では重視されていたことが明らかになったのである。（ ）に論文所収）

## 5 . 主な発表論文

### [雑誌・論文]

#### (1)雑誌

荒木康代、「商家おかみの人づくり」納税協会広報誌「ふれあい」 113～128号  
公益財団法人納税協会連合会 2014年6月～2017年12月 15回連載

### [学会発表]

荒木康代、「商家の妻を育成する 大正期の近江地域における女子実務学校成立の過程」  
2017、社会経済史学会（慶應義塾大学）

荒木康代、「大正期における女学校設立の背景についての研究」2015、日本社会学会大会  
（早稲田大学）

荒木康代、「The Power of wives merchant families」、2014、世界社会学会議（横浜）

### 交付決定額 (金額単位 円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：ジェンダー、労働、経営、生活、商家、日記、教育

## 6 . 研究組織

研究代表者 荒木康代（Araki yasuyo）大阪経済法科大学経済学部・教授）

研究協力者 稲岡正子（Inaoka masako）日記の著者杉村久子の孫・日記所有者）

石原（植木）佳子（Ishihara-Ueki yoshiko）神戸親和女子大学非常勤  
講師・元大阪市史編纂所研究員）